ゲームで自然と ふれ合おう

［対象：小学校１年生以上］

★ねらい　身近な野原や林でネイチャーゲームを行うことを通して、自然とふれ合い、自然体験を深めさせると共に、自然に対する様々な見方や感じ方を深めさせていく。

１．この実践例について

ここでは、平成５年７月10日に、吾妻郡長野原町の長野原町山村開発センター近くの広場で行った、「おもしろ科学教室　吾妻支部」によるネイチャーゲームの実践例を中心に紹介する。

２．木の葉のカルタとり
～葉の形をおぼえよう～

これは、カルタとりに似たゲームの中で、葉の形態に注目させていくことにより、その種類や特徴を楽しみながらおぼえられる活動である。

［準備物］
- ロープ（５m程度）をグループ数×２
- 落ち葉を各種、グループ数×２
- バンダナ等をグループ数
- 紙袋（不透明な袋）をグループ数

［活動に適した場所］
- 広場や室内など

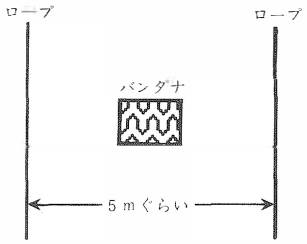
［活動に適した人数］
- １グループあたり６～10人

(1)事前準備

○周囲に見られる身近な葉を各２枚ずつ、グループ数だけ用意する。〔本来は秋から春に落ち葉を使って行う活動なのだが、今回は初夏のため、道端の草の葉（ヨモギ、マツ、ヒメジョオン、オオバコ、ツルフジ、セイヨウタンポポ）を使用した。〕

○次いで、ロープ２本を５mほどの間隔をあけて広げ、中央にバンダナ等をしく。そして、その上に上記の葉を１枚ずつおく。

○残りは、見えないように紙袋の中に入れておく。これをグループの数だけ設置する。



(2)活動のしかた

①参加者を、６～10人のグループに分ける。それをさらに半分に分けてチームをつくり、２本のロープの外側で対面させる。バンダナのそばには、審判（指導者）が紙袋を持って立つ。

②次のルールを説明してから、活動を開始する。

［ルール］

○両チームから、一人ずつ選手が出て、ロープのところで身構える。

○審判が、紙袋の中から葉を一枚取り出して見せる。

○選手はロープのところから飛び出して、バンダナの上にある葉の中から、それと同じ葉にタッチする。

○早くタッチできた方のチームが、得点を得ることになる。

なお、安全確保の面から、必ずバンダナの左側を通過しながら右手で葉をタッチするように指導を徹底する。

③しばらくしてバンダナ上の葉の特徴をとらえてきたら、それぞれの葉の名前を教えていく。

○発展として、次のようなルールの変更を行っていくのもよい。

・選手は、審判が見せた葉の名前を言ってから飛び出して、葉にタッチする。

・審判は葉の名前を言うだけで、選手はその名前の葉にタッ　する。

④最後に、葉の名前やその特徴の復習などを行ってから、後かたづけを行う。特に、活動で使った葉は、自然のものは自然に返すという観点から、身近な木の根元などに戻すようにする。

3．フィールドビンゴ

～自然の中から、目的のものを探し出そう～

これは、ビンゴゲームに似た活動の中で、五感を働かせてあたりを探る力を高めると共に、自然から発見や感動を得ることを狙ったものである。

［準備物］

・えんぴつを各個人ごとに

・フィールドビンゴカード（4×4のマス目があるカード）を人数分

［活動に適した場所］

・公園や林など

［活動に適した人数］

・特に制限なし（数人のグループでも可）

(1)事前準備

活動の前に、活動範囲を決めた上で、フィールドビンゴカードに書かせる項目を考えておく必要がある。これには、活動範囲内にある自然の事物の中から、視覚だけでなく、風の音や日差しの暖かさなどの、様々な感覚でとらえるものも含めたい。今回は、次の16項目とした。

・　ョウ　・落ち葉　・モミジ　・毛虫　・枯れた枝　・キノコ　・松ぼっくり　・葉の先についたしずく　・穴のあいた葉　・白い花　・アリの巣　・小鳥のさえずり　・風の音　・日差しの暖かさ　・痛いとげ　・花の香り

(2)活動のしかた

①参加者にフィールドビンゴカードを配る。そして、上記の16項目を一つずつ読み上げ、カードのマス目に、自由にそれを書かせていく。

②カードのマス目が全てうまったことを確認してから、ルールを説明する。

［ルール］

○これからあたりに散らばって各項目を探し、見つけたらえんぴつで○をつける。

○4×4のマス目の縦か横、斜めに○が並んだら、「ビンゴ！」と大きな声で叫ぶ。

○「ビンゴ！」と叫んだら終わりではなく、合図があるまで、○がついていないものをできるだけ探す。

また、安全指導として、行動してよい範囲を明示しておくことも忘れてはならない。

③ルール等を確認したら、解散させる。

④時間になったら集合させ、○の数などを発表させる。

○また、次のような活動も考えられる。

・低学年の児童が多い場合は、異年齢のグループをつくって行動させる。

・16の項目の中から、ひとつだけ自分の宝物として持ってこさせ、みんなに紹介させる。

4．わたしの木

～木を、体全体で感じとろう～

普段我々は、公園や林などの木を、単なる森の一部として没個性的にとられがちである。そのため、個々の木に目を向けさせ、それぞれがある種類の植物としての特徴を持ち、さらには1本1本が技振りなどに豊かな個性を持っていることに気付かせるために、この活動を行う。

［準備物］

・バンダナか手ぬぐい（目隠しをするためのもの）を各個人ごとに

［活動に適した場所］

・様々な木が生えていて、目隠しをしても安全に歩くことのできる林や公園

［活動に適した人数］

・２人ずつの組（親子のペアでもよい）

(1)事前準備

この活動を行う場所は、よく吟味しておく必要がある。具体的には、色々な種類の個性豊かな木があり、目隠しをしていても安全に歩くことができる、平担な林や公園が望ましい。また、行動範囲もきちんと限定しておく必要がある。

(2)活動のしかた

①二人組を作らせ、以下のような話をして、ゲームへの意欲化をはかる。

この林（公園）には、とてもたくさんの木があります。そして、これらの木は、よく見ると、１本１本がどこかちがっていますね。そしてこの木々の中には、一人一人の「わたしの木」が、必ずあるのです。そこで、この「わたしの木」を探しだすゲームをやってみましょう。

②ルールの説明を行う。

［ルール］

○まずは、二人組のお互いが、相手の「わたしの木」を決める。この時、それがどの木か、相手に気づかれないようにする。

○次に片方が、バンダナ等で目隠しをする。

○目隠しをしていない人が、相手の手を引いて、ゆっくりと相手の「わたしの木」に連れていく。

○「わたしの木」についたら、相手に幹をさわらせたりして、触覚を中心に十分にその木の特徴を促えさせる。

○十分にその木の特徴をとらえさせたら、元の場所に連れて帰る。

○目隠しをしていた人は、目隠しを取って、「わたしの木」を探しに行く。

○その木を見つけたら、役割りを交代してまた行う。

木の特徴をとらえるための次のような観点の例をあげる。

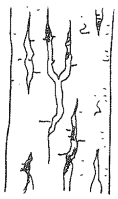
・幹の太さや技振り、根の張り方
・木肌の模様やかたさ、うろ
・葉の形や手触り
・あたりの地面の様子　　など

また、目隠しする時は、音がよく聞こえるように、耳を出させる。

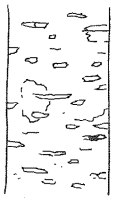
③活動の範囲や、目隠しした相手を優しく導くことなどの安全指導を行い、活動を始めさせる。

④活動が終わったら、全員を集めて、またここに来ることがあったら、ぜひ「わたしの木」にもう一度会うことを勧めて、しめくくりとする。

○また、あたりにある木の木肌などについて解説してもよい。今回の会場の周辺では、次のような木肌のものが見られた。



縦じまの木肌
（コナラ）



横じまの木肌
（サクラ）

縦にはがれる木肌
（マツ）

5．サイレントウォーク
～発見を、身振りでわかり合おう～

これは、自分が感じたことや見たことを、言葉を使わずに伝え合うことによって、互いに感動をわかち合おうという活動である。また、観察者が受動的でいられることから、周囲の生物たちを驚かさずに、ゆっくりと観察できる方法でもある。

［準備物］

・ロープを２本

［活動に適した場所］

・公園や林などの自然の豊富な場所で、１本の道が通っているところがよい

［活動に適した人数］

・２～数人のグループ

(1)事前準備

公園や林などの、道端に自然が豊富にある道にコースを設定し、スタートとゴールに、目印としてロープを地面に広げておく。できれば周囲コースで、距離は長くならない方がよい。サイレントウォークの場合、進むのに通常の５～10倍もの時間がかかることがあるからである。

(2)活動のしかた

①２～数人のグループに分けて、ルールを説明する。

［ルール］

○グループごとにスタートから入り、あたりの自然を探って、気づいたことを教え合いながら、ゴールまで歩いていく。

○ただし、スタートからゴールまでの間は、絶対にしゃべってはいけない。相手に伝えたいことがあったら、しぐさやサインで伝えること。

②その場に応じてサインを決める。

コン虫などに関係するもの

鳥に関係するもの

植物に関係するもの

③グループごとに、十分に間隔をあけながら、スタートから入っていく。

④全員がゴールから出たら、今度は気づいたことなどをみんなで話し合いながら、同じコースをたどってみる。